

SDGsカフェ、若者に届け

カップ転換、食品リサイクル



タリーズは温冷両用の紙カップを開発し、プラゴミの削減に取り組む

スタバやプロント

カフェチェーン各社がSDGs（持続可能な開発目標）の取り組みを積極的に打ち出している。スターバックスコーヒー（以下、スターバックス）は再利用可能な紙カップの提供店舗を拡大し、ドトール・日レスホールディングスはプラスチックから紙カップへの切り替えを進める。若い世代が注目する環境配慮の取り組みを前面に出し、ブランド力強化につなげようとしている。



プロントは廃棄食品で染めた商品を販売する学生の取り組みを店舗で支援した

スターバックスは再利用可能なステンレス製カップで飲料を提供し、対象店舗に戻してもらう取り組みを2021年11月

から10店舗で始めている。22年4月から、再利用カップの提供店舗を19店に拡大する。カップを

利用する際に使う対話アプリ「LINE」では二酸化炭素（CO₂）の削減量も確認でき、消費者の環境配慮の動機づけにも貢献する。

ドトール日レスはカフェチェーン「エクセルシオール カフェ」の約120店で、22年2月からアイスドリンクの持ち帰り用カップを紙カップに順次切り替えている。切り替えが完了すればプラスチックは使わなくなるとい

う。同社は「カップ本体が一番プラスチックを消費する。紙カップへの転換を急ぎプラゴミを大きく削減する」と話す。主力の「ドトールコーヒー」でもプラスチックは順次使用をやめる方針だ。

カフェ各社が環境配慮の取り組みを積極的にアピールする背景には若い世代のSDGsへの注目の高さがある。大和総研の神田慶司シニアエコノミストは「レジ袋有料化などの影響で、SDGsは若い世代を含め幅広く浸透している。消費者に向けて目立つ取り組みをすることが顧客をひきつける1つの要因になる」と話す。

プロントコーポレーション（東京・港）は21年秋、神田外語大学のゼミが廃棄食品で染めた衣料品を販売するために店舗の一部を提供した。SD

Gs担当推進部長の森谷晋一氏は「今の学生は環境配慮への意識が高い。環境への取り組みは消費者だけでなく人材獲得の面でも重要だ」と話す。同社の店舗の65%で廃棄食品をリサイクルするために回収している。店舗が同居する施設でリサイクルの仕組みがなければ独自で回収業者と契約を結ぶこともある。

タリーズコーヒー（以下、タリーズ）はアイスドリンクに紙カップへの使用を広げる方針だ。アイスとホットの両方に対応した紙カップを九州の店舗から導入を順次進めている。

夏ごろをめどに全店で導入ができる見通しで、実現すれば年間100トンのCO₂を削減できる見込みという。焙煎（ほいせん）の際に出るコーヒーの豆皮を使った紙ストローも5月から一部店舗で導入する。

新型コロナウイルスの感染拡大で在宅勤務が定着し、仕事の合間にビジネスパーソンが休憩場所として利用する需要が減っている。SDGs関連の取り組みを強化することで、若い世代に自社をたつての利用を見込む。

（津兼大輝）